

岡 島 遺 跡

1. 調査の経過

岡島遺跡は、西尾市岡島町・江原町に所在する弥生時代を中心とした遺跡である。今年度は、県道蒲郡・碧南線建設に伴う事前調査として、調査区をA・B・Cの3区に分け調査を行った。

遺跡は、矢作古川左岸の自然堤防上に立地する。付近を矢作古川の他、広田川などが流れており、これらの河川あるいはその支流がひんぱんにその流路を変えて流れていたことが想定される。

調査は昨年度行われた試掘調査結果より、遺構面が2面あることが確認されており、上面、下面に分け順次調査を行った。

遺跡の現地表面の標高は5 m程である。土地改良により客土が1 m程積まれており、この下に厚さ20 cm程の中世の遺物を含む黒褐色土が堆積する。この下が最初の遺構面であり、標高3.8～4 m程である。この遺構面は、炭化物を若干含む厚さ40 cm程の層を地山とする。そして、この下に厚さ20 cm程の弥生時代中期の包含層が堆積する。その下が弥生時代中期の遺構面で、標高3.2～3.4 m程である。

2. 調査の概要

設定した3つの調査区のうち、先に調査の完了したB区について概要を述べ、A・C区について若干補足を加える。また、厳密な時期区分は行わず、下面の弥生時代中期の遺構面を第1遺構面、上面の遺構面を第2遺構面とする。

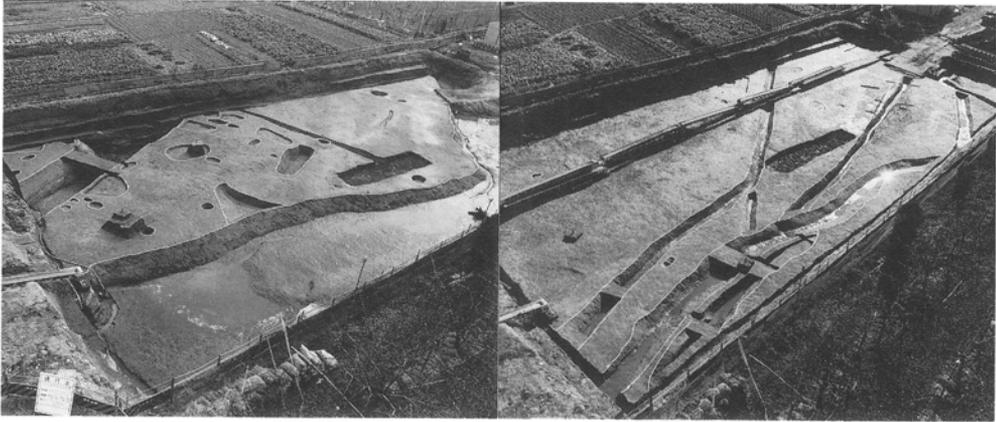
A. 第1遺構面

遺構

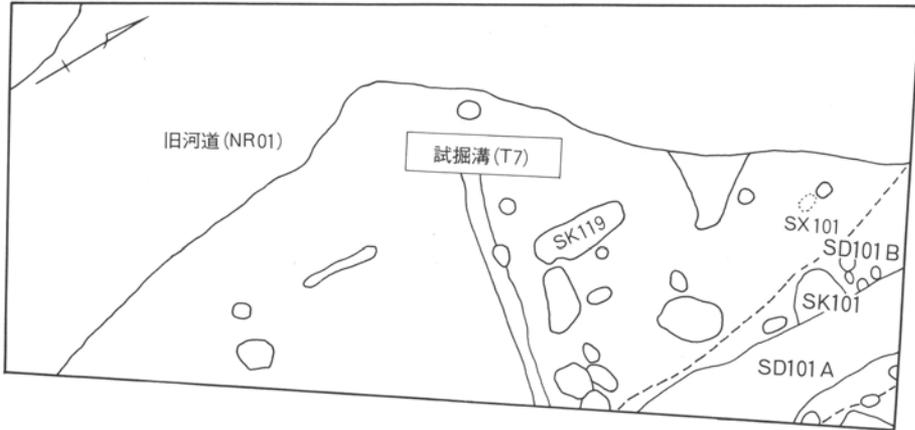
S D 101 再掘削の行われた2時期の溝である。最初の溝が掘削され、この溝が埋没しかけたところ再び掘削が行われた。この溝から弥生時代中期の土器が出土した。C区において、この続きがほぼ南北方向に検出されている。以下再掘削された溝をS D 101A、最初に掘削された溝をS D 101Bとする。



第1図 調査区位置図(1/20000)



B区 全 景(北から)
左：第1遺構面 右：第2遺構面



第1遺構面



第2遺構面

第2図 B区遺構配置模式図

SK101 SD101Bを切り、SD101Aに切られる。SD101A出土の土器とほとんど時間差が見られず、SK101が埋没した後、短期間にSD101Aが掘削され埋没したようである。このことより、SK101は掘削されてから埋没するまでの時間が短かったと考えられる。

SK119 南北に細長く伸びた大型の土坑である。SD101A、SK101と同じく弥生時代中期の土器がまとまって出土している。他の遺構と切合わず一括性の高い良好な資料となる。

SX101 落込みは見られず、遺構面上に炭化した植物質のものが楕円形状に広がり、その上に胴下半部を欠損した弥生時代中期の壺が正位に置かれた状態で出土した。

旧河道 (NR01) B区北半で検出した。A区では調査区中央で、C区では北端より検出した。河の存続時期については、なお詳細な検討が必要であるが、弥生時代中期の包含層が河の中に流れ込んでおり、また、A区で古墳時代の高杯が出土していることより、少くとも弥生時代中期から古墳時代までは河であったと考えられる。

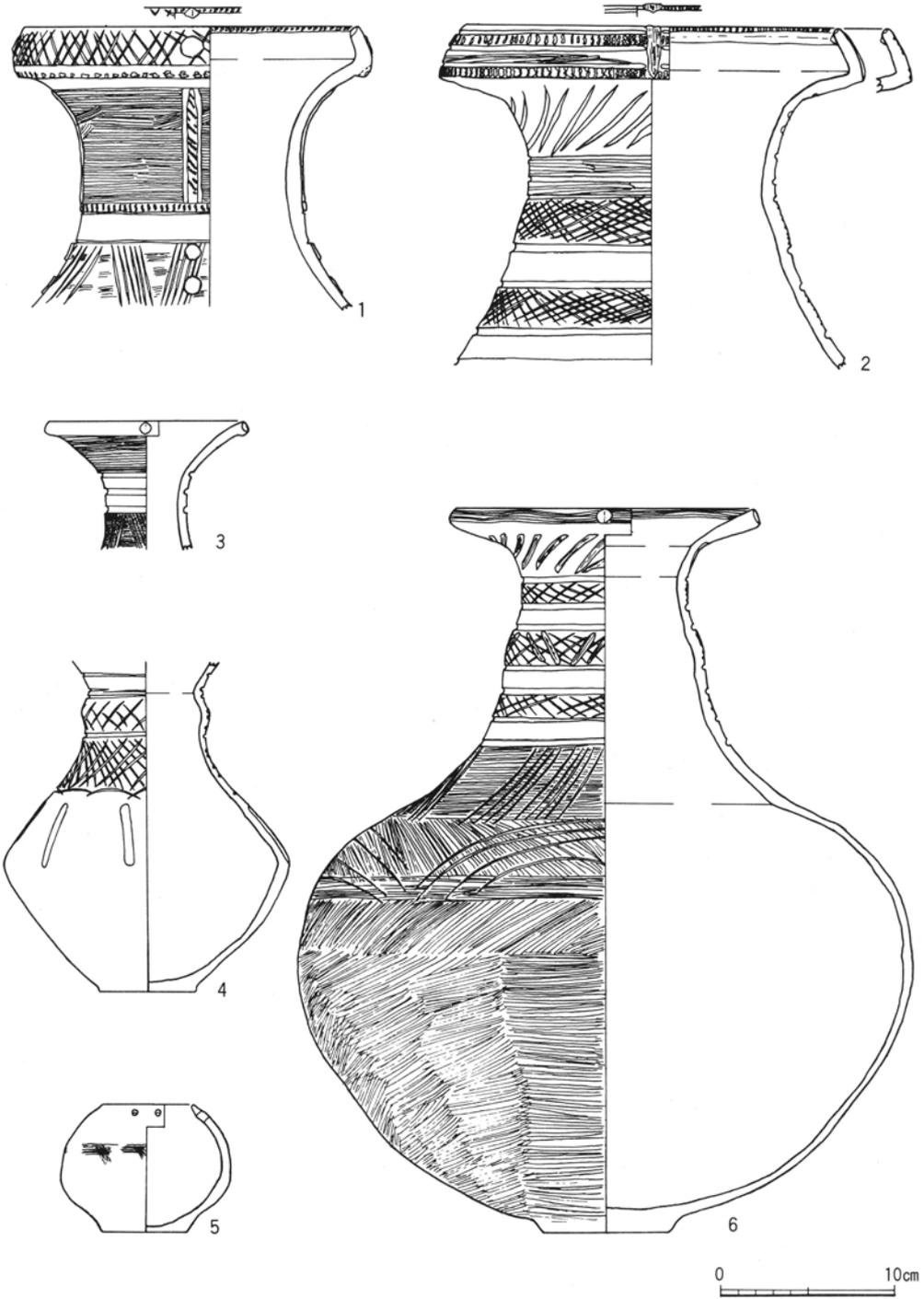
遺物

土器 弥生時代中期の土器が多量に出土している。SD101A・Bの関係により、最低2時期に分けられる。

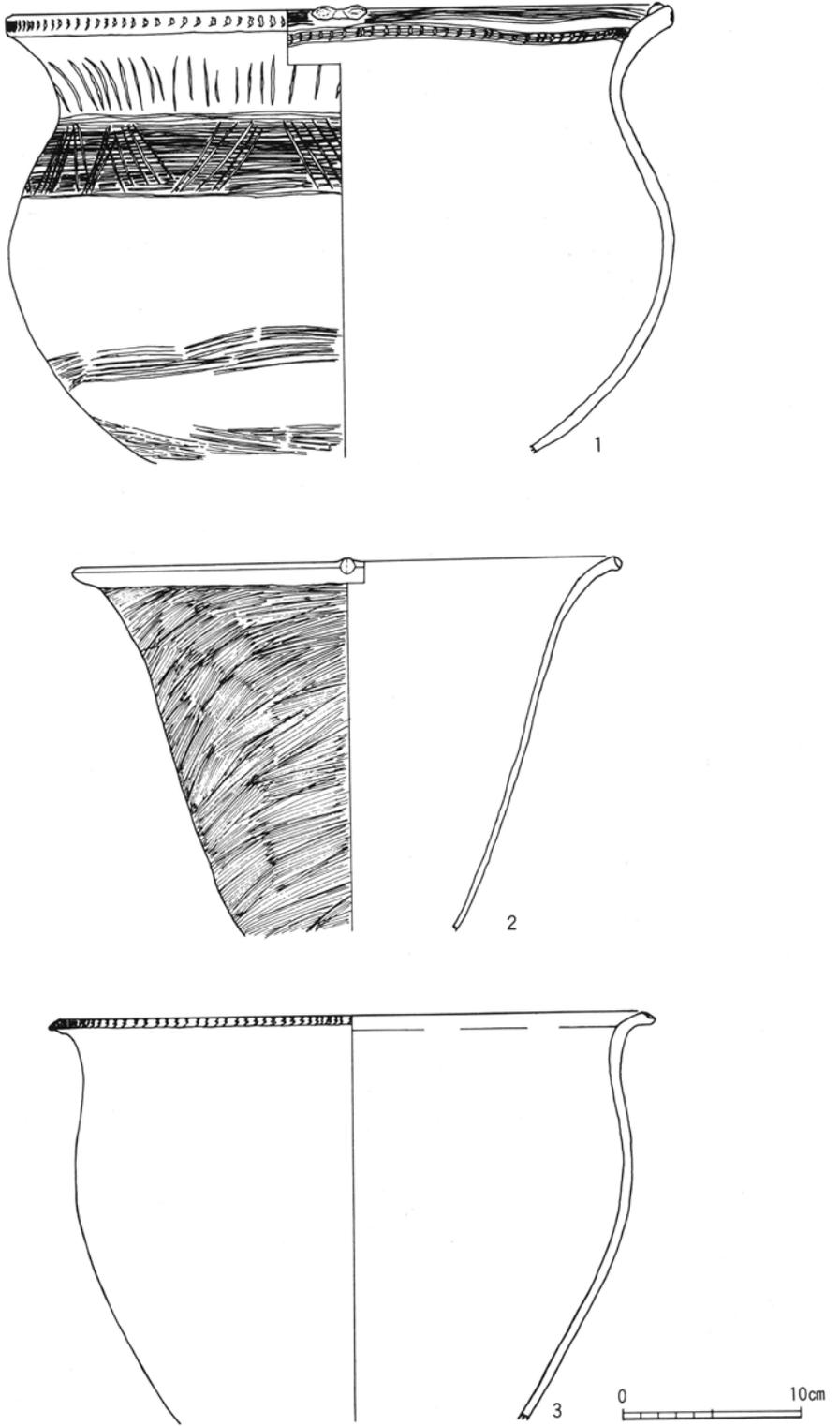
I期 B区では、SD101Bからのみ出土している。基本的な器種構成は壺と甕である。壺(第3図)は、1・2のように広口で口縁部が内湾するものと、3・6のように口縁部がゆるやかに外反し、頸部が細くなるものが見られる。主な施文具としては篋、貝殻などが用いられる。文様は、篋による斜格子目文・数条一組の沈線文、貝殻による刺突・刻目文、撥上げ文、条線文、貼付文などが主となる。2・6は横位の沈線で区画された無文帯が磨かれる。5は無頸壺である。口縁部に一對の穴を対称的な位置に2箇所施す。同様の無頸壺の破片が数点見られる。

甕は、第4図-2のように口縁部に最大径があり、底部に向って直線的にすぼまっていく深鉢形を呈する器形のみに限られる。2のように口縁端部に単独圧痕を施すものや、口縁部内面に櫛あるいは貝殻による模様を施すものも見られる。器表面の調整は、板もしくは二枚貝によって行われる。図5-1は、扁平で口縁部と胴部に最大径があり、胴部が球形に脹む。口縁部内面に突起がつけられている。I期の土器は三河地方弥生時代中期の瓜郷式に属する。

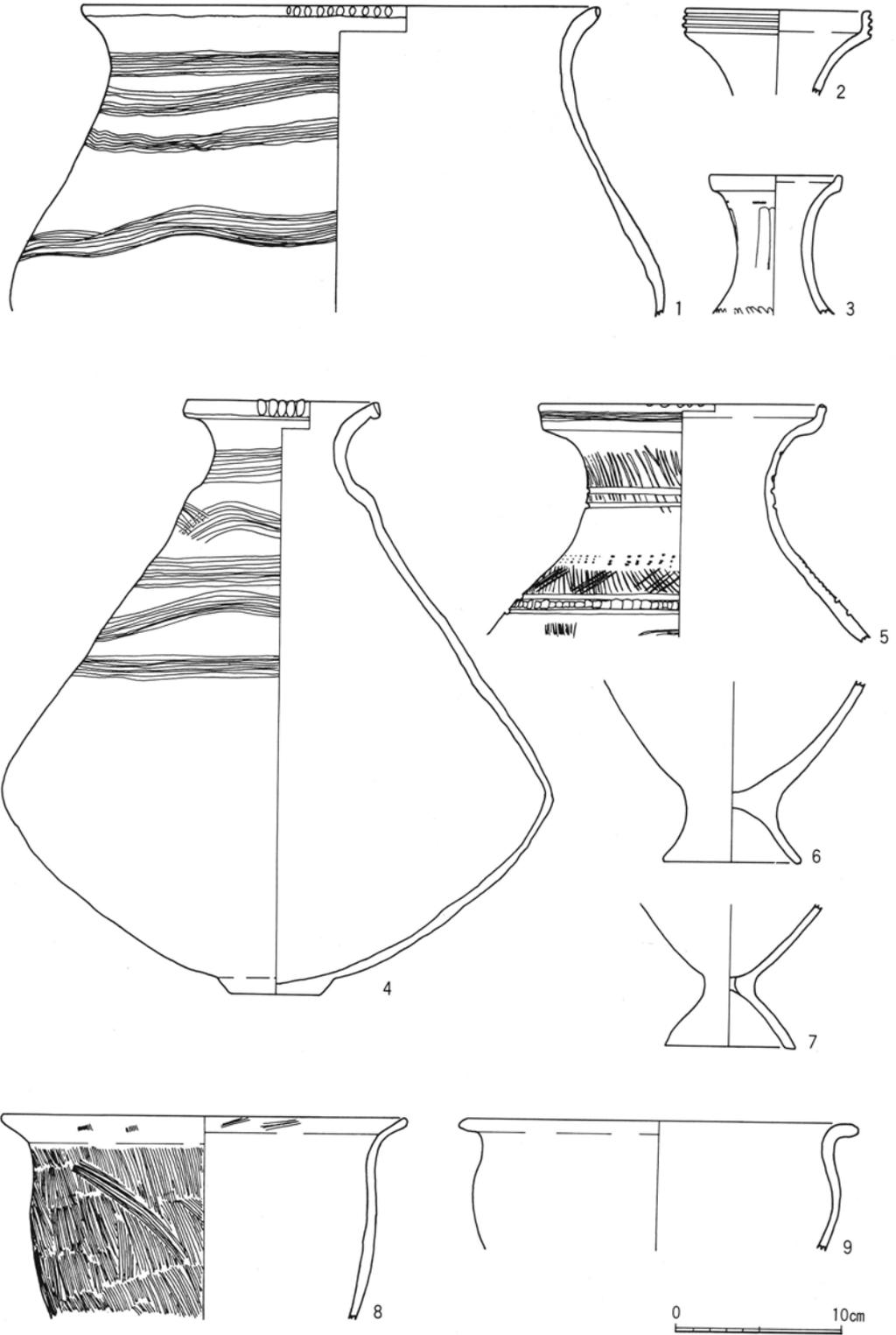
II期 基本的な器種構成は、I期と同じく壺と甕である。壺(第5図-2~5)は、口縁部が内湾するものが見られなくなり、3・5のような受口状の口縁が出現する。4のように口縁部が小さく胴下半部に最大径がくるものも見られるようになる。施文具は、ほとんど櫛だけに限られ、櫛描横線文・波状文、口唇部に施される数個一組の圧痕文が主文様となる。5は横位の沈線文による区画帯の中の篋描斜格子目文や、貝殻による押し引き文など



第3図 第1遺構面出土土器(I期1~6:SD101B)



第4図 第1遺構面出土土器(I期 1・2:SD101B、II期 3:SD101A)



第5図 第1遺構面出土土器(Ⅱ期 2~8: SD101A、1-9: SK119)

I期の影響が残る。I期が装飾的であったのに比べ、II期は文様が簡素化する。また、篋から櫛へという施文具の変化が見られる。2は尾張地方の沈線文土器であり、この時期の三河地方と尾張地方との併行関係を考える上で重要である。

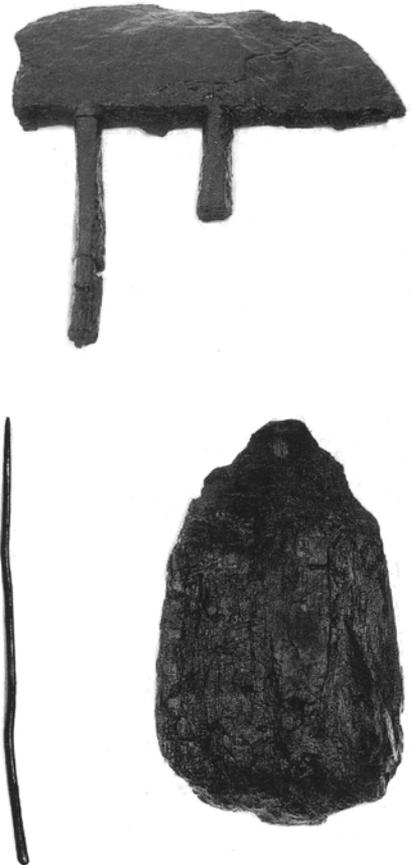
甕（第4図-3、第5図-8・9）は、I期と異り、若干形態の違うものが見られるようになる。図5-3は、口唇部に貝殻による刺突文を施す。また、第5図-6・7のような台も多く出土している。全景の分る資料に乏しいが、台付甕の台と思われる。7のように焼成後底部穿孔が行われたものが半数ほどある。これらの台が、I期に見られずII期に見られるようになることや、底部穿孔など台付甕の出現や機能などを検討する必要がある。II期の土器は三河地方弥生時代中期の古井式に属する。

木製品

又ぐわ 身・歯を部分的に欠損する。刃幅27cm 6本歯である。歯の断面形は長方形である。現存する長さは16cm程であるが、もう少し長くなる。身丈は現存部で10cm程である。現存部のすぐ上が頭部で、丸くなるようであり着柄隆起はなかったと考えられる。

すき すき身のみ出土している。一木すきであり、刃幅13cm・身丈22cm程である。

弓 一端を欠損していると思われるが、ほぼ完形あるいは完形の可能性がある。弓幹はあまり屈曲せず直線的である。長さ64cm程である。断面は不定形な円形をなす。筈と思われる部分は先端を尖らせただけであり、もう一端は弓幹の中で最も太く、先を丸く仕上げる。欠損した後に丸くしたものか、最初からこのような形態の筈だったのか検討を要する。木枝を利用して作られたものようであり、加工は面取りを行う程度である。



S D101B 出土木製品
(上：又ぐわ、左下：弓、右下：すき)

これらの木製品は、いずれもS D101Bより出土し、弥生時代中期に属する。

この他、包含層中より多量の弥生時代中期の土器と、石斧・石包丁などの石器が出土している。また、S D101B、旧河道内より、種子・獣骨などの自然遺物も出土している。

B. 第2遺構面

遺構

溝 5条検出されている。埋土、形状などより、比較的時期の近接した溝と考えられる。旧河道埋没後に掘削されたものであり、旧河道が古墳時代までは河であったことから、これらの溝の時期は、早くともこれ以降である。A・C区でB区の続きの溝が検出されたものもあり、弧状を呈するようである。

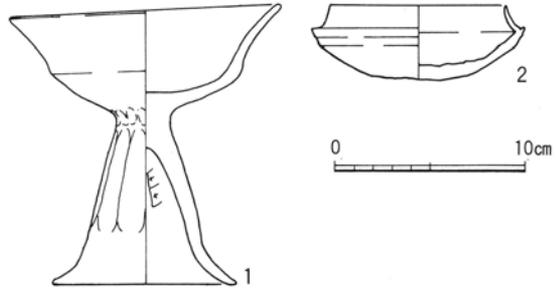
土坑 5基検出されている。S K 03内より、古墳時代の高杯が4点つぶれた状態で出土した。

竪穴住居跡 1軒検出されている。一部調査区外に出るが、平面形は隅丸方形であり、柱穴3基、土坑1基を検出した。

どの遺構も遺物の量が少く、出土しているものもローリングを受け、摩滅しているものが多く、時期決定は困難である。

遺物

土器 第2遺構面での土器の出土量は少く、大多数は摩滅しており残存状況は不良である。第6図-1はS K 03より出土した古墳時代の土師器高杯である。また、S D 01上層より古墳時代の須恵器杯（第6図-2）が出土した。



第6図 第2遺構面出土遺物 (左：SK03、右：SD01)

3. まとめ

今年度は、岡島遺跡の外縁部に当る箇所調査を行った。遺構、遺物とも量的に多くはなかったが、第1・2遺構面の遺構の厳密な時期決定や、性格の究明による遺跡景観の復元や、遺跡の時間幅、また、弥生時代中期の土器の良好な資料による、いまだ不明な点の多い三河地方のこの時期の土器編年の再検討、確立、といったように今回の調査によって今後検討すべき重要な問題が提起された。(野口哲也)